連載「大友時代を生きた人々」

国際文化学部鹿毛敏夫教授の「吉田牧庵～宗麟が招いた都の薬師～」が掲載

●大分合同新聞朝刊　2017年2月25日(土)

大友時代を生きた人々

鹿毛　敏夫

吉田牧庵

宗麟が招いた都の薬師

鹿児島の薩摩藩がまとめた「薩藩旧記雑録」という史料の中に元亀2（1571）年5月21日の書状があります。「このたび豊後にいたり、久我殿様御下向候」

「久我殿様」とは、室町時代後期の貴族として後奈良天皇に仕え、正二位・権大納言となった久我晴通のことで、1560年代以降たびたび都から九州に下り、大友義鎮（宗麟）と面会しています。

特に元亀元（1570）年には、長年続く西国の紛争を調停する目的で、「豊芸無事」（豊後大友氏と安芸毛利氏の休戦）をあっせんする将軍足利義昭の御内書と織田信長の奉書を伴って義鎮の元に訪れています。

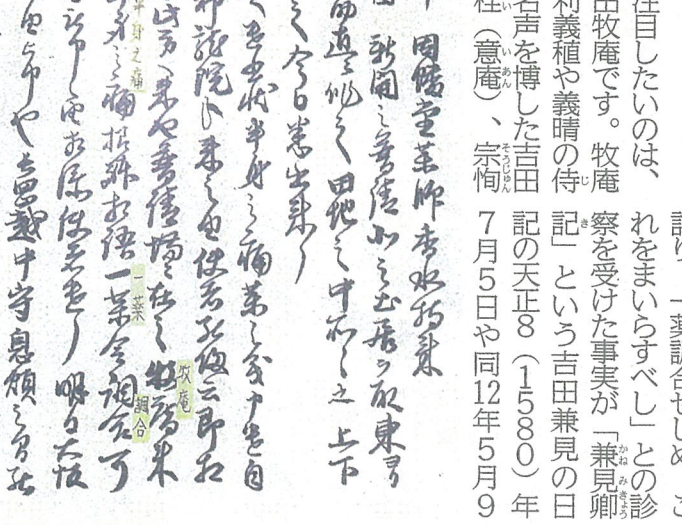
ところが、元亀2年の豊後下向の際には、書状の続きに、「紫野和堂様、薬師牧庵、狩野源四郎（民部の子にて候）、後藤源四郎（三郎四郎の子にて候）、めいじんそろへ下り申し候」と記されています。

「紫野和堂」は京都大徳寺の禅僧怡雲宗悦、「薬師牧庵」は医師の吉田牧庵、「狩野源四郎」は絵師狩野松栄の子の永徳、「後藤源四郎」は金工家後藤光乗の子の後藤徳乗。禅僧・医師・絵師・金工家といった4人の「めいじん」（名人）がそろって久我晴通に同行し、豊後に下ったというのです。

都の貴族の九州下向に伴っての各界「めいじん」の豊後訪問は、もちろん単なる物見遊山の旅とは考えられません。

中でも注目したいのは、薬師の吉田牧庵です。牧庵は将軍足利義稙や義晴の侍医として名声を博した吉田宗忠、宗桂（意庵）、宗恂につながる医師と思われます。

神道家で京都吉田神社の神主吉田兼見は、牧庵から「たびたび良薬」を授かり、また「牧庵来たる、この間半身の痛みの様体をあい語り、一薬調合せしめ、これをまいらすべし」との診察を受けた事実が「兼見卿記」という吉田兼見の日記の天正8（1580）年7月5日や同12年5月9日の記述から確認できます。



牧庵の医療活動が頻出する「兼見卿記」

臨済宗一山派の禅僧仁如集堯は、吉田牧庵の豊後訪問の理由について、その著作「鏤氷集」に「吾友牧庵公赴豊之後州、伝聞、国君以道愛人、施仁発政」と記しています。

「私の友人の牧庵が豊後に赴いた。伝え聞いたところでは、豊後国の大名大友義鎮は、道をもって人を愛し、仁を施して政を発するとのことだ」。それ故、都からの旅人はみな豊後を目指し、「一芸に名ある者は、庸いざるなしなり」。

吉田牧庵が薬師としてのその優れた「一芸」（医療・治療技術）の発揮を期待されて、大友義鎮に用いられたことが分かります。

（名古屋学院大学国際文化学部教授、大分市出身）

＝毎月1回掲載＝